

Title	恋歌と茶の湯
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	淡交. 53 P.84-P.88
Issue Date	2008-06
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24309
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

恋歌と茶の湯

岩井茂樹

「チューラーロンコン大学文学部東洋言語学科日本語講座専任講師」

恋の歌掛物

恋の歌掛物は、茶の湯という場において忌避される傾向にある。なぜ茶の湯では恋歌を忌避するのだろうか。そういった風潮はいつ頃生まれたのだろうか。

まずは、恋歌の忌避がいつ頃からはじまったのか、その時期について見ていこう。

茶書におけるもつとも古い記述は、『江岑夏書』の（寛文三年〈一六六三〉七月七日）である。

一 戀の哥ハかけ候事、休不被成候、定家ニも三幅在之、

○わたのはらふりさき見れはかすかなる三笠の山に雪ハふりつ、

○八重もくらしけるやとのさひしきに

○こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつ、
「休不被成候」は、「利休は行なわれなかつた」という意味である。ここに挙げられた三首は、いずれも百人一首の歌であるが、このうち恋の歌は三首目の「こぬ人を・・・」だけだ。通常恋歌は掛けないが、この恋歌だけは茶の湯の時に掛けてもいいというのである。このような恋歌に関する言説を、歴史的に通覧してみると、次のようなことがわかる。

茶の湯の流派は大別すると、千家系（三千家〔表・裏・武者小路〕と、その分派）と大名系（遠州流・石州流など）になるが、このうち、恋歌に関する記述がある茶書は、いずれも千家系の茶書に限定される（『茶道

要録』『茶道望月集』『不白筆記』など)。また、恋歌忌避の記述が多く見られるようになるのは、元禄期(一六八八〜一七〇四)以降のことである。一方、大名系の茶書には、恋歌に関する記述は一切見られない。

茶の湯では、掛物の他に茶道具の銘を歌からつけることがある。いわゆる歌銘である。だが、茶書に見られる恋に関する記述はすべて、掛物に関するもので、銘に関する規約や制約はない。実際に、銘には恋歌由来のものが多く存在する。

恋歌を使うとき

次に茶会記を見てみよう。茶会記からは、次のようなことがわかる。

まず、寛永年間(一六二四〜四四)以前の茶会では、名物意識が強く、歌の内容はほとんど考慮されていない。つまり、季節感を表現するものとして掛物を選ばれることはなかったし、掛物に恋歌が使われた場合でも、それは意図的に用いられたものではない。翻つていうと、寛永期以降、茶会において歌の意味が重視されるようになったからこそ、恋歌に関する問題も起こってきたのである。

様々な茶書で恋歌非難がなされたが、茶会記には恋歌が使われた茶会の記録もある。歌の意味、道具組、客組などから恋歌を用いた意図を推定した結果、恋歌を用いる理由は、次の五パターンに分類することができる。

- I…客人歓待(待ちわびていたという気持ちを伝えるもの)
- II…故人追悼(故人を追悼する気持ちを述べたもの)
- III…遊興(遊びとして)
- IV…季節表現(季節の言葉が歌中に入っていたりするもの)
- V…名物重視(小倉色紙などの貴重な歌掛物)

恋歌の掛物は、ここに挙げた要素の一つ以上の理由から選ばれ、用いられる。

恋歌を忌避する理由

では、なぜ千家系だけが恋歌を忌避するようになったのだろうか。いくつかの理由が考えられるので順に説明していこう。

① 利休追善

茶会記上、千家系の茶会において使用された例は、すべて利休追善茶会であった。利休二二〇、二五〇、三五〇回忌に恋歌が掛けられている。なぜ、利休の追悼のために恋歌が用いられたのか。千家系が恋歌を用いたのは、追善供養として故人を偲ぶという意識があるからだ。だが、どうもそれだけではないようである。もしそれだけの理由なら、歴代の宗匠の追善茶会に恋歌を掛けていてもよさそうなものである。しかし、そのような例は現在のところ確認できていない。

では、なぜ利休追善に限って恋歌が用いられたのか。そこには、利休が成仏、あるいは往生していないという風聞が根強くあったからではないだろうか。江戸時代から明治にいたるまで、利休が秀吉の茶室に幽霊となつて出るという話が、広く知られていた。『武辺咄聞書』第八〇話（延宝八年（一六八〇）跋）などがその代表である。秀吉に理不尽な死を言い渡されたために、利休が死後、幽霊となつて秀吉の前に現れたと考えられ、それが明治以降も語り継がれていた。

『南方録』における天正一十七年（一五八九）二月二十八日の利休の言葉、

末世出現の仏も無きにあらず、此道に於ても得心の人後代に出来し、御坊や休が志を感通することもあるべし、さやうの人に
一服の茶を手向られたれば、百年の後たりとも、骸骨うるほい
を得、亡魂などかうけよるこぼざるべき、必茶道の守神となる
べし、仏祖もなか力こそへ玉はざらんと。（傍線筆者）

や『千利休由緒書』『茶道要録』の「利休めはとかく果報乃ものそかし皆相丞になるとおもへハ」（傍線筆者）という歌、『茶道四祖伝書』

『茶湯秘抄』などの、「利休めはとかく果報のものぞ(か)しあら人神と成とおもへバ」(傍線筆者)といった歌などを見ると、利休が死後、何らかの神となって現れるという俗信が根強くあったのだろう。利休の荒ぶる魂を鎮め、慰撫するために恋歌が用いられたのではないだろうか。同時に、そこには茶聖・利休の復活(もちろん精神的なものであるが)を望む気持ちも含まれていたのかもしれない。

②倫理的な戒め

次に考えられるのは、技術、倫理、精神面における戒めである。というのも、恋歌というものは上手に使用しないと、下品になったり、客に不快感を与えたりしかねない。とりわけ千家系が大名系と著しく分化した江戸時代、特に風俗が乱れた元禄期には、主に儒学者によって恋歌が非難されることが多かった。そういった儒教的道徳が強くなった結果、茶の湯でも恋歌が禁じられた可能性がある。

だが、よく考えてみると大名系、つまり主に武士たちが行なう茶の湯のほうが儒教の影響を多分に受けそうなものである。しかし、現実はそのようではなかった。この理由は、おそらく茶会に対する考え方の違いにあると思われる。つまり、千家系にとって茶会とは俗世から離れる場であったのに対し、大名系それは堅苦しい儒教的な倫理から解放される場であったのではなからうか。茶会というのは、日常世界から離脱する場であることは、「市中の山居」という言葉をはひくまでもなく明らかであり、その意味では千家系と大名系は共通した意識を持っている。ただ、俗世から茶室へ、倫理的な場から茶室へというベクトルの方向が違うにすぎない。極論すれば、千家系における茶会というのは、色恋の世界からの転出であり、翻って大名系のそれは、色恋の世界への転入なのである。これが、恋歌を忌避するか否かの違いとなって現れたのではないだろうか。両者の茶室の大きさや使い方も、恋歌忌避につながる一つの要因であろう。

③女性の参加

もう一つ考えられることは、茶会への女性参加である。谷晃氏によると、茶会記に初めて女性が登場するのは、文禄四年（一五九五）九月二五日の小早川隆景の茶会であるという。また氏は、それより早く『御湯殿上日記』などの天正期（一五七三〜九二）の日記類に女性の参加記録を見出している。女性の茶会参加は、種々の草子類の中にも見出すことができるし、近松門左衛門の浄瑠璃『鍍の権三重帷子』^{（ごんざむらびら）}には、松江藩の小姓・笹野権三が藩の茶道役・浅香市之進の妻に茶を習っているうちに、不義の疑いを掛けられるという場面があったりする。こういった文学作品が生まれる背景には、当然女性の茶会参加が考えられる。もちろんその数は多くなかっただろう。だが、元禄期以前にも、間違いなく女性が茶会に参加していた。当時は男色も盛んであったから、男同士の茶会でも恋歌という素材は忌避されるものだったのかもしれない。

恋歌という視座

寛永期頃から掛物の歌の意味を解するようになったことで、恋歌という「素材」が、茶会という恋が成立する「場」に供給された。そして、先に述べたいくつかの要因が加わり、恋歌を忌避するという思想が生まれたのであろう。

恋歌と茶の湯の関係を知る試みは、まだはじまったばかりである。茶書上では恋歌を禁止している流派でも、定家様^{（ていけさま）}で書かれた恋歌なら許される場合もあるようだ。今後、より精緻な研究と調査によって、恋歌と茶の湯の関係が明らかになっていくことであろう。そうなれば、今まで看過されてきた茶の湯の思わぬ一面が顕在化することは確実だ。

恋歌は、茶の湯が持つ豊穡で多様な歴史と思想を知るための、小さくはあるが、確かな手掛かりなのである。

岩井茂樹（いわい・しげき）

一九六九年、奈良県生まれ。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻修士（博士〈学術〉）。国際日本文化研究センター勤務を経て、現在、チューーローンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座専任講師。著書に『茶道と恋の関係史』（思文閣出版）がある。